

2018年7月29日の説教(要旨)

聖書 ローマの信徒への手紙 3章 21～26節

説教 「神の義が示された」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ローマの信徒への手紙 3章 21節からはこの手紙の本論第2部が始まります。「不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます」(1章 18節)という言葉から始まった第1部は、「なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前に義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです」(3章 20節)という言葉で結ばれています。人間のどうしようもない罪の暗闇が書き表されてきたのです。

しかしパウロは、暗闇を引き裂く上よりの光が射していることを声を大にして叫ぶのです。「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました」(21節)。驚くべきことが起こったのです。神の義が、人間の思いも及ばない仕方で、暗闇の中にいる人間を裁き滅ぼす仕方ではなしに、すべての人に与えられることになったのです。「ところが今や」とは、主イエス・キリストによって決定的な転換がなされたことを表わしています。「今」という言い方は、パウロが「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」(コリントⅡ6:2)と言うときの「今」と同じです。

旧約の時代が終わり新約の時代が到来したのです。それについては、「律法と関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて」と書かれています。一見矛盾するようですが、旧約と新約の間には非連続と連続の関係があるというのです。すなわち、「律法とは関係なく」とあるように、キリストによる救いは律法の命じる行いを私たちが満たすことによって与えられるのではないのです。人間の方から、神さまとの関係を、修復することはできません。「ところが今や、神の義が示された」とは、神の側からの働きかけであり、恵みによって創造された救いの道なのです。

けれども一方、この新しい神の義は、まったく唐突に降ってきたわけではありません。これはかねてから「律法と預言者によって証しされて」いたのです。神がイスラエルの民と結ばれた古い契約は、民の不従順によって破棄されるほかなかったのですが、神は契約に対する真実のゆえに、ご自身の方から新しい契約を用意されたのでした。

この新しい神の義は、「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません」(22節)と語られます。神の義は私たちが満たすのではなく、イエス・キリストによって明らかにされ、それを信じる私たちに与えられるものです。ここで、「イエス・キリストを信じることにより」と訳されている部分は、原文ではただ「イエス・キリストの信仰」と書いてあって、「イエス・キリストを信じることにより」と訳するのがよいのかどうか、議論のあるところですが。イエス・キリストがもっている信仰と読むこともでき、信仰とは真実というのと同じ言葉ですから、ここはイエス・キリストの真実と訳することもできるのです。

本年末、日本聖書協会が「聖書協会共同訳」という聖書を刊行する予定です。もっとも、口語訳も新共同訳もそれぞれ十分に考え抜かれた翻訳ですから、それを乗り越えるような翻訳が簡単にできるわけではなく、たぶん口語訳や新共同訳のそれぞれの良い点を合わせていくような形にならざるを得ないのだらうと思います。けれども、今度の翻訳は、かねて議論のあるこの箇所を、口語訳や新共同訳が訳してきたような、私たちがキリストを信じる信仰というのではなく、「キリストの真実」と訳すことにしたのです。すなわち「神の義は、イエス・キリストの真実を通して、信じる者すべてに現されたのです」と訳しています。従来の翻訳が間違っているわけではありません。しかし、ここを読むときに忘れてならないことは、私たちの信仰が救いの条件ではないということです。われわれの信仰がわれわれを救うのではなくて、イエス・キリストが神にささげた真実の服従こそが、神の義を明らかにし、それが私たちを救うのだということです。

この「イエス・キリストの真実を通して、信じる者すべてに現された神の義」は「何の差別もありません」と書かれています。先にパウロは、人間の罪に関して言えば、ユダヤ人も異邦人も神の裁きを受けるべきである点で同じであり、何の差別もないことを語っていました。同じように、こんどはイエス・キリストによって神の義が与えられるということにおいても何の差別もないということです。

まったくの罪人が、今や神の義にあずかる者とされたのです。そのことがさらには「人はみな、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです」(23～24節)と言い表されています。私たちは神に背き、神から離れてしまった結果、神の栄光を映し出せる者ではなくなっていました。自分の正しさや知恵を積み上げていけば、神のようになれるとか、神に近づけると考えることは、私たちの大いなる勘違いです。私たちから神へと通じる道はありません。しかし、神が下ってきてくださったのです。神が私たちの一人となられて、愚かでの外れな私たちとご自身との正しい関係を打ち立て、救い取ってくださいるとするのが新しい神の義です。そのための必要な手立ては神がすべて打ってくださいったのです。神はご自身の契約を踏みにじった私たちを取り戻すために、愛する御子を遣わし、御子の血を十字架上で流させて、私たちをご自身のもとに取り戻してくださいったのです。そこに神の義が、神の愛が、そしてひとたび召し出した者たちを決してお見捨てにはならない神の真実が貫かれているのです。